

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On orthographic variations of Gjurgi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/519

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



人名 ГЮРГИ の表記をめぐって*

岡 本 崇 男

1 はじめに

Гюрги という人名はギリシャ名 Γεωργίος に由来する洗礼名 Γεωργии/Георгии の東スラヴ語形で、中世ロシア年代記でよく見られる形式であり、現代の Юрий の起源はこれにある。一般に洗礼名の正式な形式には、ビザンツ経由のギリシャ語的特徴を保持したものと南スラヴ的なものがあるが、東スラヴ語形はいずれのタイプからも作られる。例えば、ギリシャ型の Иоаннъ 対して Иванъ があり、南スラヴ型の Владимиръ には Володимиръ, Володимиръ が用意されている。そして、東スラヴ形にはさらに Иванъ → Иванъко, Володимиръ → Володимиръко のように接尾辞による派生形や、正式な形式の語幹から一部だけを取り出した形 (Володимиръ → Володаръ) など様々なバリエーションが存在しうる。もちろん、Гюрги にも Гюрята, Гюргята という派生形がある。

こうした洗礼名の東スラヴ形の中で、筆者が Гюрги という人名に注目した理由は、これが以下に述べる二つの点において、他の同類の形式と大きく違っているからである。

先ず、この形式には、東スラブ文章語の表記の規範に違反する文字結合が

* 本論文は文部科学省科学研究費補助金による成果の一つである (基盤研究(B), 「ロシア諸年代記の正本と異本の PC 利用による比較対象研究とその応用」, 平成20年度～22年度。課題番号: 20320050。研究代表者: 名古屋学院大学教授・中條直樹)。

2種類含まれている。すなわち，ГЮ と ГИ である。文字同士の接点が全部で4つある中で，2つの結合が不正であるのだから，これがかかなり異様な形式であると考えて差し支えない。次に，この形式には Юрьи や Дюрги など，かなり見かけが違うにもかかわらず，1つの基本形の語幹の一部に接尾辞を付加して形成された派生形ではなく，むしろ同一語彙の表記のバリエーションだと思われるものがいくつか存在している。

本論文の目的は，この Гюрги という人名と，その表記のバリエーションについて，中世ロシア文章語の正書法と正音法の観点から検討を加え，バリエーション間にある関係を特定することにある。

2 正書法における Гюрги の位置付け

2.1 正式形 Георгии の発音

現代ロシア語ほど厳格ではないが，中世ロシア文語にも正書法は存在していた。これによれば，子音文字と母音文字の結合には一定の制限がある。それを示したのが表1である。

表 1：子音文字と母音文字の結合

系列		前母音字						後母音字				
		И	Е	Ѣ	Я	Ю	Ь	Ы	О	А	У	Ь
I	ПБВМ	+	+	+	+	—	+	+	+	+	+	+
II	СЗТД	+	+	+	+	—	+	+	+	+	+	+
III	НЛР	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
IV	ШЖЧЦШЖД	+	+	+	+	+	+	—	—	(+)	(+)	—
V	КГХ	—	—	—	—	—	—	+	+	+	+	+

すべての母音文字と結び付くことが許されているのは，Ⅲの系列の鳴音を表す文字のみであって，他の系列の子音文字には何らかの制限がある。特に，顕著な対立を示しているのがⅣの系列の硬口蓋化子音文字とⅤの系列の後口蓋子音文字である。原則として，硬口蓋化子音文字は前母音文字としか結合

せず、後口蓋子音文字は後母音文字としか結合しない。また、文字 Ю は前母音文字の中でも、結合できる子音文字の制限が大きく、純粋な硬口蓋子音（Ⅳの系列）以外と結び付くことができない。以上のことから、Гюргиにおける ГЮ および ГИ という文字連続が中世ロシア文語において極めて特殊なものであったことがわかる。ただし、ここで強調しておかなければならないのは、これらの特殊な結合が、ある程度の期間安定して使用されていたということである（これについては後で詳しく述べる）。つまり、Гюрги は表記の基本原則に違反する綴りでありながら、これ自体は規範形として取り扱われた時代があったということなのである。

それでは、なぜ正書法に違反する綴りが標準形として採用されたのであろうか。この問に対しては、おそらく様々な答えがありうると思われる。しかし、単純に考えると、キエフ・ルーシ時代の写字生たちが特殊な表記に訴える必要に迫られた原因は、古スラヴ語の正書法および正音法の基盤となったバルカン半島の南スラヴ語と古スラヴ語の文献文化を受け入れたキエフ・ルーシの東スラヴ語の音体系が違っていたことにあると言えそうである。つまり、古スラヴ語の文字に対応していない東スラヴ語固有の音声を表す必要があったから古スラヴ語の正書法にない文字結合を使わざるを得なかったのかもしれない。

ところが、Гюрги の正式な形式である Георгии にも「Г+前母音字」（ГЕ, ГИ）の結合が含まれている。この正式な形式は、古スラヴ語の文献でも実証されている。『古スラヴ語辞典』[17] によれば、もっとも頻度の高い綴りは ГЕОРГИИ である。なお、この辞書における見出し語は ГЕОРГІИ となっている。この人名は古スラヴ語の「カノン」に属する『アッセマーニ写本』、『サヴァの本』、『スプラシル写本』や現存する東スラヴ最古の文献の一つである『オストロミール福音書』を始めとするいくつかの古文献に登場するようである。なお、上記の見出し語の表記には ГЕ, ГИ のように子音文字 Г と前母音文字 Е, И の間に読み分け記号（[^]）が挿入されている。これは『ス

ブラシル写本』(聖者伝, キリル文字)の表記法の一つで, 後口蓋音 KTX の直後に前母音¹が来る外来語にのみ見られる記号である [21, p.51]。なお, グラゴール文字文献である『アッセマーニ写本』では, キリル文字の Г¹ に対応する文字 Ꙑ が使われている。これらは, 伝統的にローマ字転写で g と表記されることが多いのだが, その音価についてはよくわかっていない [20, p.20]。語彙によって硬口蓋化された後口蓋閉鎖音 [gʲ] であったり摩擦音の [j] であつたと説明されていたり [22, p.14], あるいは [ɣʲ] と [j] の中間の音であつたと言われている [2, pp.36-37]。また, 外来語におけるこの文字の発音は地域によって違っていたと考える研究者もいる [21, p.87および p.89]。

スラヴ人が国家単位でキリスト教を受け入るようになるのは, コンスタンティノスとメトディオス兄弟が活躍した 9 世紀半ば以降のことで, その当時のギリシャ語で Γεωργίος がどのように発音されていたのか, そして当時のスラヴ語でギリシャ起源の外来語の ΓΕ, ΓИ がどのように発音されていたのかを正確に知ることはできない。ただし, 中世ギリシャ語で文字 Γ は前母音の前で [j], 後口蓋子音の前で [ŋ], それ以外の音声の前では [ɣ] と発音されていたと言われており [22, p.15], 東スラヴ語において генварь (генуарь, геноуарь,...) 「1 月」のように, ラテン語 ianuarius に起源を持つ語彙に енуарь (енуарь) という別形が存在していたことから, キエフ・ルーシにおいても中世ギリシャ語の正音法が効力を持っていた可能性を否定することはできない。したがって, キエフ・ルーシの文献文化の初期の段階では, 正式な形式である Γεωργии (およびその表記上のバリエーションの Георгии) の発音には, 現代ロシア語のような後口蓋閉鎖音の軟子音 [gʲ] も南ロシア方言やウクライナ語, ベラルーシ語の諸方言のような後口蓋摩擦音 [ɣ] も聞かれなかった可能性が高い。むしろ, 硬口蓋摩擦音 [j] か, こ

¹ この記号は本来, 鳴音を表す文字 H J P の直後に付けられて, それらが硬口蓋化音(後の軟子音)であることを表していた。この記号が採用されている古スラヴ語文献は, 『スブラシル写本』以外に『ゾグラフォス写本』(四福音書, グラゴール文字)がある。

れに類する音声であった可能性が高い。²

Гの直後が前母音であるか後母音であるかによって読み方が違っていたことは以前から知られていたことである。この南ルーシ方言群（южнорусское наречие）に一般的な現象は、Л.Л.Касаткинによれば、環境に起因する補完的な子音交替 [ɣ]～[j]ではなく、同一の母音の直前で対立する硬子音と軟子音の相関ペアであったとみなしている[12, pp.200-201]。つまり、南ルーシの東スラヴ語の話し言葉には、ГЕ, ГИを[je], [ji]と読む可能性が内在していたというのである。

しかし、本論文ではГЕ, ГИを[ge], [gi]と読まないことは、東スラヴ語の音体系とは無関係の現象であって、これらの綴りを含む語彙がルーシに借用された時から決まっていたことだという立場で議論を進める。

2.2 Гюрги という表記が成立した過程

さて、正式形 Георгий と東スラヴ形 Гюрги とを比較して、単純に外見の違いに注目すると、語頭では母音の変化（ГЕО→ГЮ）があり、語末では母音の脱落（ГИИ→ГИ）起きたように見える。これらの変化の過程についてもう少し詳しく検討してみたい。

先ず、第一の母音の変化は、おおよそ eo>ö>ü に類したものであったらしい。文字連続 EO も非スラブ語起源の外来語にしか見られないもので、東スラブ語では単母音化するのが普通である。例えば、現代ロシア語の Семён<

² アレクサンドル・イサチェンコは、『イバーチー年代記』のテキスト中に見られる Гюрговичь「Гюргиの息子」を例に挙げて、この語形に含まれる2つのГを「明らかに硬口蓋化された摩擦音 [ɣ] で読むか、あるいは摩擦音の [j] と読んでもよい」と述べている[19, p.194]。硬口蓋化された後口蓋子音 [ɣ] に言及するのはいささか不用意なのであるが、Гюрг-を単なる Юрь-の表記上のバリエーションと考えることは正しいと思われる。なお、Гюрговичь という表記は例外的なもので、Гюргевичьの方が一般的である。『イバーチー年代記』における変化形を含めた出現頻度は、前者が3であるのに対して、後者が41である。

古スラヴ語においても初期の東スラヴ語においても /g/ (Г) は硬口蓋子音 /ʒ/ (Ж) と起源的な結び付きを持っている。同様にК—Ч, Х—Шという関係が成り立っている (око—очи, гьнать—жену, ухо—уши)。そして、Ж Ч Шはギリシャ語にない音を表している。つまり、ギリシャ起源の語彙には現れない。したがって、Гは文字と同じ音ではなさそうである。

Симеон<Сүмень (<Συμεών)³, Фёдор<Феодор<Ѡеодоръ (<Θεόδωρος),
 Федосий, Федосей<Феодосий<Ѡеодосий (<Θεοδόσιος), Фофан<Фофан
 <Ѡеοφάνη) などにも母音化の傾向がはっきりと見て取れる。
 ただし、どちらの母音が脱落するのは予測不可能である。ΓΕΟ→ΓΙΟ の場合
 は、母音脱落ではなく変音化（「ウムラウト化」）で単音化が実現されたもの
 だと考えることができる。

それでは、語末の母音脱落はどのような過程を辿った結果なのであろうか。
 表 2 に示された Георгии のパラダイムから判断すると、前者の語幹は
 Георги/j/- で、後者の語幹は Гюрг/j/- のように見える。つまり、正式名は
 {GEORGIIJ}-{Ī, A, U/EVI, EMĪ, E}, 東スラヴ語形は {GJURGJ}-{Ī,
 A, U/EVI, EMĪ} という形態構造を持っているように見える。

表 2 : Георгии と Гюрги のパラダイム

	ГЕОРГИИ	ГЮРГИ
主格	Георгии	Гюрги
生格	Георгия	Гюргя
与格	Георгию, Георгиеви	Гюргю Гюргевѣ
対格	Георгия	Гюргя
造格	Георгиемь	Гюргемь
所格	Георгии	—
呼格	Георгие	—

両者の形式を比較すると、正式名の Γ が前母音の作用で変化し(これ以降、
 その結果を便宜的に {Ĝ} と表記する), Γ の性質を変えてしまった前母音自
 体は消滅し、母音連続が単母音化されることによって、東スラヴ語形が生ま
 れたと考えてよさそうである。ただし、Γ が変化した結果がどのような音価
 を持っていたのかはわからない。

つまり、以下のような音声過程が進行したと思われる。

{GEORGIIJ} → {ĜEORGĪ} → {ĜÜRGĪ}

³ ギリシャ語の綴りは[23]に依拠した。

ここで、{Ġ}を{J}に置き換えると、{ĠÜRGĠ}は{JÜRĴ}となる。そして、{JÜ} → {JU}, {RJ} → {R'J}とすると、{JUR'Ĵ}すなわち Юрьи が出来上がる。導出の手続きがやや強引に過ぎると思われるかもしれないのだが、東スラヴ語形が成立する過程はおおよそこのようなものであったと思われる。

なお、「Γ+前母音」の文字結合については、かつて ДЪЖДЪ の表記上のバリエーション ДЪЖГЪ の ЖГЪ の音韻的解釈を巡って議論が交わされたことがある。その概要はロマン・ヤコブソンの論文 [18] で知ることが出来る。ここでは、Γ を /j/ と解釈する可能性があることに言及されているのであるが、ヤコブソン自身は Γ(Ь) が破擦音 ž (= /dž/) を表していると主張している。その根拠は「Γ が j を表していたのであれば、13-14世紀の古文献に Γ と Ъ ところどころ取り違える誤りがあってもおかしくない。なぜならば Ъ はイェルが消失した後、母音の直前の位置で j の音価を持つようになったから」 [18, p.248] だという。しかし、「Γ+前母音」という結合が、本来不正なものであることを考えると、「Ь+前母音」の結合において Ъ の代わりに Γ が書かれる可能性は限りなく小さい。また、「Ь+後母音」という結合は本来あり得ない綴りであるが、かりにそれがあったとしても Ъ を Γ に取り違える可能性は更に低い。古スラヴ語から継承した正則形 ДЪЖДЪ と北部ルーシの ДЪЖГЪ、そして南ルーシの ДЪЖЧЪ における ЖДЪ, ЖГЪ, ЖЧЪ の音価が実際には同じである (žž) というヤコブソンの議論には説得力があるのだが、この種の特殊な表記は語彙ごとに個別に決定されるのではないかとと思われる。なぜなら、反則が規則化されれば、それはすでに規範なのである。中世ロシア文章語において、Γ が前母音 Е, И と結びつくのは、外来語に限って許される特例であったのなら、それに一定の音価が慣習的に充てられていたとしても不思議ではない。そして、その音価自体は東スラヴ語の子音体系の枠内に収まるものであったはずである。

3 表記のバリエーション

人名 Георгий の東スラヴ語形は Гюрги だけではない。中世ロシアの年代記における Гюрги の表記上のバリエーションは、3のタイプに分類することができる。⁴

まず、第1のタイプは、Гюрги に代表される、語幹が Гю- で始まる形式で、Гюргя, Гюргеви, Гюргята, Гюргевичв のように語幹末の -Г- が前母音字 Я, Е И, Ъ と結び付く。ただし、語幹末の -Г- が後母音字 А, О と結び付く例も若干見られる (Гюрговичь, Гюрговъ)。また、語幹末の -Г- が脱落した Гюря, Гюриеви のような例もある。

第2のタイプは、第1のタイプから文字 Г が脱落した形式である。つまり、現代ロシア語の Юрий とほぼ同形の Юрьи で代表される形式である。ただし、これには語幹末の Г が保たれた異形が存在している (Юрги, Юргя, Юргевиць)。

第3のタイプは、特定の年代記にしか見ることができない Дюрги という形式で、第1のタイプの語頭の Г が Д に置き換えられている (Дюрги, Дюргя, Дюргеви, Дюргевиць...)。ただし、これは一般的な形式であるとは言い難く、代表的な中世ロシア年代記でこの形式が観察されるのは、『イパーチー年代記』のみである。この年代記には、語幹末の Г が Д に置き換わった形式 (Дюрди, Дюрдя, Дюрдеви, Дюрдевиць...) や語頭が Г で語幹末が Д の形式 (Гюрди, Гюрдевича) も見られる。

以下に示す表3は、これら3つのタイプの全てが揃った『イパーチー年代記』における、東スラヴ語形の出現頻度である。

⁴ 事例の検索にあたって使用した主要な年代記資料は、『原初年代記』（過ぎし年月の物語）、『スーズダリ年代記』、『ノヴゴロド第1年代記』古輯・新輯、『イパーチー年代記』である。これらについては、それぞれの年代記のコンコードダンス（〔4〕,〔6〕,〔3〕,〔5〕,〔9〕）、および語彙索引（〔1〕のみ）に依拠し、さらにこれらのコンコードダンスの底本である『ロシア年代記集成』に収められたテキスト（〔13〕,〔14〕,〔15〕）を随時参照した。さらに、これらよりも成立年代が遅いと思われる年代記も参考資料とした。それらは『モスクワ年代記集成（15世紀末）』、『ノヴゴロド第4年代記』、『ソフィア第1年代記』、『プスコフ諸年代記』（第1・第2・第3年代記）である。こちらについては、コンコードダンスのみを使用した（〔7〕,〔8〕,〔10〕,〔11〕）。

表 3 : 『イパーチー年代記』における東スラヴ語形バリエーションの出現頻度

		後 半 部		
		$R\hat{G}$	$R\hat{D}$	R'
前半部	$\hat{G}\ddot{u}$	250	3	3
	$\hat{D}\ddot{u}$	122	17	—
	$J\ddot{u}$	8	—	89

この表の見方は次のとおりである。まず、それぞれのタイプの東スラヴ語形の語幹を 2 つの部分に分ける。第 1 音節は正式名 Георгий の前半の ГЕО を継承した部分とし、第 2 音節は残りの РГ (И) に当たる部分とする。 $\hat{G}$ 、 $\hat{D}$ は、「Г+前母音」、「Д+前母音」と表記されている音価不明の子音であり、 R' は硬口蓋化された Р、そして $\ddot{u}$ は単母音化された ЕО を表している。各コラムの数値は、それを含む行の左端に表示されている第 1 音節の形式とそのコラムの上端に表示されている第 2 音節の形式を組み合わせた語幹が出現する頻度である。

このように東スラヴ形は語幹の始まり方を基準にすると 3 のタイプに大別されるのだが、語幹を前半部と後半部に区分すると、後半部にも 3 通りの形式があることがわかる。これらの組み合わせを、現頻度が高い順に並べると、Гюрги > Дюрги > Юрьи > Дюрди > Юрги > Гюрди > Гюрьи となる。そして、上位の 3 形式が残りの形式に比べて圧倒的に頻度が高い。さらに、前半部と後半部の結合の可能性に注目すると、 $\hat{G}\ddot{u}$ は後半部のすべての形式と結び付くのに対して、 $\hat{D}\ddot{u}$ と $J\ddot{u}$ は、 R の直後に前半部を形成する子音が立つ形式としか結び付かない。つまり、 $\hat{D}\ddot{u} + R' (\leftarrow RJ)$ 、 $J\ddot{u} + R\hat{D}$ の組み合わせの例が一つもない。

前半部では $\hat{G}$ 、 $\hat{D}$ 、 J という 3 種類の子音が、語幹の先頭の位置に現れて、その直後に前母音 $\ddot{u}$ が続き、後半部では同じ 3 種類の子音が子音 R の直後の語幹末の位置に現れるのであるから、前半部と後半部は音声的環境が同じではない。先に述べた前半部と後半部の組み合わせにかんする制限の原因もこうした事情によるのかもしれない。いずれにしても、出現頻度の合計だけ

を判断基準にしてなんらかの仮定を述べることは不可能である。

そこで、今度は年代記におけるそれぞれの形式の分布を調べてみる。『イパーチー年代記』における、正式な形式と東スラヴ語形の分布をまとめたものが表4である。

表の見方は次の通りである。縦の列は底本 [14] の欄外に記載された原本のページ数（第2葉表から第307葉裏まで）で、20葉を一つの単位としている。最下段のAからEのローマ字は、筆跡の違いである。底本の序文によれば、この年代記には5つの筆跡が識別されるという [14, F]。

表4：イパーチー年代記における分布

	0					100					200					300
	0	20	40	60	80	0	20	40	60	80	0	20	40	60	80	0
Георг-	1	—	5	2	1	4	1	2	3	1	—	1	1	—	—	6
Гюрг-	—	—	—	—	2	4	85	79	55	19	2	3	—	—	—	—
Дюрг-	—	—	—	—	—	1	9	50	59	4	—	—	—	—	—	—
Дюрд-	—	—	—	—	—	4	2	—	4	2	5	—	—	—	—	—
Юрг-	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	4	—	—	—
Юрь-	2	—	1	1	—	4	2	—	1	2	11	3	9	12	25	16
筆 跡	A		B		C	D			B		E			C		

分布表を見て、先ず気がつくのは、第120葉以降から第180葉にかけて、Гюрг- が頻出し、それよりもやや少ない範囲で Дюрг- がかなり高い頻度で現れているということであろう。このように、出現頻度の総計が1位と2位の形式が年代記のちょうど中間部に集中して現れているのに対して、第3位のЮрь-は第200葉以降によく現れている。ただし、上位の2つのタイプよりも分布が分散しており、その分だけ出現が集中的でないという特徴が伺える。

実は、この年代記の中間部、特に第97葉表から第175葉裏までは「手長公」として知られるユーリー（Юрий Владимирович）が活躍した時代（1133-1158年）の記録なのである。Гюрг-、Дюрг- が集中して現れる範囲がそれと重なっており、ほとんどが「手長公」のことであることから、この年代記におけるこの公の重要度が高いことがわかる。この「手長公」の没後にもそれ

なりの頻度で Гюрг-, Дюрг- などが見られるのは、その息子 Всеволод に父称がつけられるからである。しかし、第 202 葉以降は Г, Д で始まる東スラヴ語形は使われなくなる。「手長公」と同名の孫 Юрий Всеволодович の名前は Юрь- と表記されている。ところが、正式な形式である Георг- は低い頻度でありながらも、年代記全体を通じてほぼまんべんなく現れており、「手長公」にも使われている。

以上のことから以下のような予想を立てることができる。

1. 正式名 Георгии はもっとも基本的な形式であって、書き手による偏りもなく、均等に分布する。
2. Гюрги のタイプは特定の人物、または特定の時代と関連がある。
3. Дюрги も Гюрги と同じ傾向を持っており、さらに特定の地域との関連が否定できない。
4. Юрги は Гюрги, Дюрги よりも後の時代の人物にかんして用いられることが多いが、これら 2 つよりも一般性が高い。

このように、3つの表記のバリエーションは、特定の時代との関連を持っているように思われるのだが、筆跡の違いから判断する限り、古い時代の記録の方が早く書かれたということができない。ただし、年代記を書くための原資料には、その当時の言語特徴が反映されていたはずである。ただし、その原資料も何度が書き写されるうちに、写字生の規範感覚に影響されて徐々に姿を変えていくのかもしれない。しかし、古風な表記であっても規範の範囲に収まると判断されたものであれば、そのまま受け継がれる可能性もある。したがって、時間との関連においては、Гюрги と Дюрги がほぼ同時期のもので、Юрьи はこれらよりも新しい形式だと言えそうである。もしそうであれば、『イパーチー年代記』が成立した時代には、Юрьи が規範的であり、中間部の主として D の筆跡になる部分は Гюрги, Дюрги が規範であった時

代の資料をもとにして書かれたということになる。

『イパーチー年代記』の成立時期は15世紀半ばというのが有力であるらしい [14, F]。上述の時間と形式との関連にかんする仮説を検証するためには、15世紀半ば以前に成立した年代記における出現頻度と分布を調べる必要がある。そこで、次に1377年に成立した『ラヴレンチー年代記』を構成する『原初年代記』（過ぎし年月の物語）と『スーズダリ年代記』、13世紀から14世紀半ば頃までの複数の筆跡が認められる『ノヴゴロド第一年代記・古輯』について調査してみる。

先ず、表5が『過ぎし年月の物語』における諸形式の分布状況である。上段2列の数字は写本自体のページ数ではなく、印刷本[13]に表示された段数を表している（各ページ2段組みで、それぞれの段に通し番号が付けられている）。従って、それぞれの例の出現数は20段単位での頻度である。

この年代記の記述の内容は一部異同があるものの（例えば、『モノマフの教訓』の有無や出来事の記述の詳細さに違いが認められる）、『イパーチー年代記』の第98葉（260段）までの内容とほぼ平行している。つまり、同一の資料をもとにして書かれたものなので、正式形 Γεωpr- と東スラヴ形 Γюрpr-/Γюр-, Юpr-/Юp- の分布のパターンも似通っている。

表5：ラヴレンチー年代記における分布(1) 『原初年代記』

	0					100					200				
	0	20	40	60	80	0	20	40	60	80	0	20	40	60	80
Γεωpr-	2	—	—	—	—	—	2	2	1	2	2	—	—	—	—
Γюрpr-	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	—	1
Γюр-	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—
Юpr-	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
Юp(ь)-	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	1

ユーリー「手長公」とその息子フセヴォロドおよび孫ユーリーにかんする記述は『ラヴレンチー年代記』の後半部である『スーズダリ年代記』に見ることができるので、次にこちらの年代記における分布状況を検討する。

表 6 : ラヴレンチー年代記における分布(2) 『スーズダリ年代記』

	200	300						400					
	90	0	20	40	60	80	0	20	40	60	80		
Γεωργ-	1	1	1	4	2	—	5	6	7	8	—		
Γюрг-	1	11	69	40	8	2	16	6	28	1	—		
Γюр-	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—		
Юрг-	—	—	—	—	2	6	17	8	16	1	—		
Юр(ь)-	—	—	—	—	—	3	—	—	2	13	1		

表 6 を見ると、320-339段から340-359段にかけて Γюрг- が高い頻度で出現し、360-379段から Юрг- が登場していることがわかる。年代記テキストと照合してみると、この形式が初めて現れるのは366段（1174年の記事）であった。『イパーチー年代記』ではこれとほぼ同じ年の記事（第200葉表、1173年）から Γюр-（および Дюр-）が目立って使われなくなり、その代わり Юрг- が標準的な形式となっている。しかし、『スーズダリ年代記』では、確かに Юрг- の出現頻度が高くなっているのだが、Γюр- の方が相対的に多用されており、この傾向が最後まで変わらない。二つの年代記は特に12世紀のチェルニゴフを中心とした出来事の記述にかんしては共通点が多いため、同一の資料に依拠していると考えて良さそうなのだが、詳しさの点で『イパーチー年代記』のほうが『スーズダリ年代記』に勝っている。また、前者には12世紀以降の西ウクライナやベラルーシの出来事が記録に収められているという後者にはない特徴がある。つまり、二つの年代記は、原資料の扱い方と種類が異なっているわけで、そのことが Γюр- の出現頻度の違いとして現れていると思われる。このことはおそらく年代記の成立時期とも関係があるのかもしれない。仮に、『イパーチー年代記』が15世紀中頃に成立したという説を信じるとすれば、『スーズダリ年代記』、すなわち『ラヴレンチー年代記』は、それよりも1世紀前にすでに完成していたのであるから、編纂に際して使用された資料にも古いものが多く含まれていた可能性が高い。従って、Γюр- は Юрг- よりも古い規範形だということになる。

それでは、『ラヴレンチー年代記』よりも更に早い時期に成立した『ノヴゴロド第一年代記・古輯』においてはどのような状況なのであろうか。

表7：ノヴゴロド第一年代記（古輯）における分布

	0											100							
	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90		0	10	20	30	40	50	60	
Георг-	—	3	—	3	1	1	2	1	—	—		2	2	—	2	1	3	3	
Гюрг-	—	4	24	9	1	3	2	1	16	10		8	4	1	—	—	—	—	
Гюр-	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	1	—	—	—	—	
Юрь-	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	10	2	6	6	24	
筆 跡	A					B						C					D		

表7の上段2列の数字は原本のページ数で、それぞれの形式の出現頻度が10葉単位で集計されている。また、最終列の「筆跡」は底本の序文で解説されている4種類の筆跡で、AとBは13世紀のもの、Cは14世紀前半、Dは14世紀後半のものであるという[15, p.5]。

この年代記が示す分布状況には極めて明確な特徴が二つ現れている。まず、第121葉表まで Гюр- が独占的に使用され、その裏から突然 Юр(ь)- が現れると、1つの例外を除いて（Гюрята 第127葉表）Гюр- 系のバリエーションは姿を見せなくなる。つまり、13世紀の二人の写字生は Гюр- しか使用しておらず、14世紀前半の写字生がやや唐突に Юр(ь)- に乗り換えている。そして、もう一つの顕著な特徴は、東スラヴ形のバリエーションが少ないことである。Гюрята（主格・第127葉表）とその父称 Гюрятиницю（与格・第11葉裏、第16葉表）の合計3例に Гюр- という形式が認められるものの、実質的にこの年代記では二つの東スラヴ形 Гюр- と Юр(ь)- が正式形 Георг- と共存しており、東スラヴ形同士の競合がない。そして正式形 Георг- は、いままで見てきた年代記と同様に均等な分布を示している。

結局、『イパーチー年代記』と『スーズダリ年代記』における東スラヴ形の分布状況から予想されたように、規範に変化があったということは確実に言えそうである。しかし、『スーズダリ年代記』に比較的多く見られた Юр-

が『ノヴゴロド第一年代記・古輯』には1例も現れていない。そして、成立時期が相対的に新しい『イパーチー年代記』では、Юрг-の頻度が極めて低く、Юр(ь)-の方が一般性が高い。以上のことから、規範形式の変遷のプロセスは Гюрг->Юрг->Юр(ь)-ではなく、過渡的な形式を介さずに、直接 Гюрг->Юр(ь)-となった可能性が高い。

それでは、この折衷的な Юрг- という形式は何なのかという疑問が生ずるのであるが、これについては、『ノヴゴロド年代記』の古輯と新輯を比較することで一応の答えを得ることができる。

表 8：ノヴゴロド第一年代記（新輯）における分布

	100					200					300					400	
	0	20	40	60	80	0	20	40	60	80	0	20	40	60	80	0	20
Георг-	—	—	1	2	3	5	4	2	1	3	2	3	5	1	—	2	3
Гюрг-	—	—	—	1	—	5	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
Гюр-	—	—	—	1	—	3	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Юрг-	—	—	—	4	—	15	—	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—
Юр(ь)-	—	—	—	15	2	12	10	16	16	15	6	25	9	18	14	28	7

今までと同じように、本論文のテーマとなっている人名の正式形 Георг-と東スラヴ諸形の分布を調査した結果を示したのが表 8 である。上段 2 行の数字は、印刷本 [15] のページ数であり、各形式の出現頻度が 20 ページ単位で集計されている。3 種類の筆跡が認められるとのことであるが、それらはいずれも 15 世紀前半から中頃までのものなので [15, 序文 p.7-8]、新輯は古輯よりも 1.2 世紀後に書かれたということになる。新輯は古輯よりも分量がかなり多いのであるが、それにもかかわらず、二つの年代記の記録内容の基本的な部分はおおよそ一致している。したがって、いずれもノヴゴロドで成立した文献であるので、同一内容の記事にかんして古輯と新輯の記述を比較すれば、表記の規範の変遷を確認できることが期待される。

表 8 から明らかなように、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』の東スラヴ形分布は、古輯とは全く違ったものになっている。Гюрг-/Гюр- は完全に廃れ

てしまっており、Юр(ь)- が一般化している。しかし、ここでは Юрг- が Гюрг- よりも高い頻度で現れているので、これが Гюрг- の次の規範形式であったかのようにも見える。そこで、これらの例が含まれている文と同内容の記録を古輯に求め、新輯の Юрг- が古輯でどうなっていたのかを調べると、古輯に内容の一致する文が見つかった15件の全てが Гюрг- だということがわかった。古輯において表記の規範が Гюрг- から Юр(ь)- に変わるのは1238年の記事が書かれている第121葉裏であった。一方、新輯では同じ年の記事が286ページから始まっている。そして、新輯において Юрг- の最後の例が現れるのが280-299ページであり、それ以降 Гюрг- が1度使用されることを除き、東スラヴ形は Юр(ь)- で統一されている。つまり、古輯において東スラヴ形の表記規範が Юр(ь)- に推移したことは、新輯にも確実に反映されている。従って、古輯の1237年以前の記事で規範的な形式であった Гюрг- のほとんどは新輯で Юр(ь)- となり、一部についてのみ Юрг- という折衷的な表記が適用されたのだと考えるべきである。

新輯の底本テキストのほとんどの部分は同一の筆跡で書かれていることがわかっている[15, 序文 p.7]。そしてこの写字生にとって、東スラヴ形は古い規範にもとづくものであっても新しい標準形であっても、また折衷的な形式であってもあまり重要な意味をもっていなかったのではないと思われる。以下に示すのは6657 (1149) の記事である。これはユーリー手長公が当時のキエフ大公イジャスラフとペレヤスラヴリ付近で戦ったのだが、イジャスラフ側についていたペレヤスラヴリの軍勢がユーリーの工作によって寝返ったため、イジャスラフがキエフを去り、ユーリーがキエフ大公になるという一連の出来事を記述したものであるが、新輯では古い規範 Гюрг- (Гюрговымъ—所有形容詞中性単数造格)、新しい規範 Юрь- (Юрьи—主格)、そして折衷的な Юрг- (Юрги—主格) が続けて現れている。同一の記事が書かれた部分は古輯では第108葉表である。ここは古い規範が守られていた部分であり、Гюрг- が3度現れている。新輯の写字生が古輯のテキストか古輯と同じ原資

料を元にしてこの一連の出来事を書いたことは明らかなので、この人は古い資料の中で規範意識に合致する Юрь- が使われていれば、そのまま抵抗なく受け入れたが、古風な Гюр- の処理には一貫性がなかったということになる。おそらくこれらの3つの東スラヴ形は、15世紀前半のノヴゴロドでは、正音法上全く等価な表記のバリエーションであり、古い時代の記事に古風な形式が現れることは、むしろ書き手にとって当然のことであったのかもしれない。⁵

〔新輯〕 В то же лѣто Юрьи прииде на Киевѣ, позванъ Святославомъ Ольговицемъ, и бишася у Переяславля, переяславци сѣдоша на щитѣ, научениемъ Гюрговымъ; и сѣде Юрги в Киевѣ, а Изявлавъ бѣжа въ Володимирѣ. (第108葉表)

〔古輯〕 Въ то же лѣто Гюрги приде на Киевѣ, позванъ Святославомъ Ольговицемъ, и бишася у Переяславля, переяславци сѣдоша на щитѣ, научениемъ Гюргя; и сѣде Гюрги Киевѣ, а Изявлавъ бѣжа Володимиру. (第26葉表)

同じ年、ユーリー（手長公）はオレグの息子スヴァトスラフに呼ばれてキエフにやって来た。彼ら（ユーリーとスヴァトスラフの連合軍）はペレヤスラヴリの付近で（イジャスラフの軍と）戦い、ペレヤスラヴリの人々はユーリーに唆されて降伏した。そしてユーリーはキエフに座し（＝大公座に就き）、イジャスラフはヴラヂミリに逃れた。〈6657（1149）年〉

結局、東スラヴ形の規範の推移は、新しいものが古いものを完全に駆逐するのではなく、許容されるバリエーションとして古い規範形も残しながら、新たな規範形が一般化していくという過程であったと思われる。折衷的な形

⁵ この状況は、『イパーチー年代記』や『スーズダリ年代記』でも同様で、東スラヴ形が混在し、場合によっては正式形も特段の区別なく使用されることがある。

式 Юрг- は, Гюрг- に代わる新しい規範形 Юрь- がすでに定着し, さらにある程度の時間が経過した時代になって生じた疑似的な古形の一つであろう。『ノヴゴロド第一年代記・新輯』においても外来語以外の語彙で「Г+前母音字」という結合はまだ一般的ではなく, 辛うじて ГИ が княгини/княгиня に見られるに過ぎない (古輯では常に княгын-)。したがって, Юрги は ГИ を含んでいる点で Гюрги と同様の価値を持つ形として14世紀に定着したと推定される。

なお, 『ラヴレンチー年代記』を構成する二つの年代記と『ノヴゴロド第一年代記』の古輯および新輯にはもう一つの折衷的な形 Гюр(ь)- の例が若干ながら見られる (『過ぎし年月の物語』に2例, 『スーズダリ年代記』に2例, 『ノヴゴロド第一年代記』の古輯に3例, 新輯に5例)。また, 表4では省かれているが『イパーチー年代記』にもこのタイプの形式が1例存在している。この Гюр(ь)- は, 古い年代記に現れ, 後世の年代記にも継承されているが, その出現は偶発的である。従って, この形式は Гюрги が標準であった時代に派生したのだが, 擬古形として定着しなかった形式であると思われる。事実, 15世紀中期以降に成立したといわれている『モスクワ年代記集成』, 『プスコフ諸年代記』, 『ノヴゴロド第4年代記』, 『ソフィア第一年代記』では使用例が一つもない。⁶

ところで, 『イパーチー年代記』で比較的頻繁に現れる Дюрги, Дюрди のような Дю- で始まる形式は, 本論文で調査資料とした他の年代記には一つの使用例も見当たらない。この事実は, 明らかにこの表記が局地的な規範にもとづくものであったことを物語っている。ただし, それがどこの規範であ

⁶ 『モスクワ年代記集成』, 『プスコフ諸年代記』, 『ノヴゴロド第4年代記』, 『ソフィア第一年代記』における人名 Георгии/Гюрги の出現頻度をそれぞれの年代記のコンコーダンス ([7], [8], [10], [11]) で調査して, 以下のような結果が得られた。すなわち, (1) 正式形 Георгии はどの年代記でも安定して使用されている。ただし頻度は高くない。(2) 東スラヴ形はどの年代記においても Юр(ь)- が一般的である。(3) 『モスクワ年代記集成』と『プスコフ諸年代記』には, Гюрг- と Юрг- の使用が認められるが, 『ノヴゴロド第4年代記』と『ソフィア第一年代記』にはいずれも現れない。(5) 『プスコフ諸年代記』と『ソフィア第一年代記』には現代ロシア語に通じる Юри- (語幹 /jurij-/) が比較的頻繁に見られる。

るかはいまのところわかっていない。この年代記は、キエフ、チェルニゴフ、ガリチ、ヴォリニ、ポロツクなど南西ルーシ（現在のウクライナおよびベラルーシ）の出来事が特に詳しく書かれているのだが、テキストに現れる言語の特徴は様々ではない。В.М.Клосс による底本の序文によれば、5 人の書き手のうち第3と第4の書き手（表4の筆跡CとD）に方言特徴が顕著であり、「“у”と“в”，“и”と“ять”，“и”と“ч”が混同される」[14, F] 傾向にあるという。ただし、これが具体的にどこの方言を反映したものであるかについては書かれていない。実際のところ、第1の方言特徴は南西ルーシ特有の現象であり、第3の特徴は北ルーシの方言によく見られるものであり、第2の特徴は南ルーシにも北ルーシにも存在する。この年代記が「南ルーシで作られた原写本をもとにブスコフで成立した」[14, 同]と А.А.Шахматов が判断した理由も、この方言特徴の混在にあると思われる。問題の Дюр- 型の表記の例のほとんどは、第4の書き手（筆跡D）が書写したテキストに含まれているので、これもある種の方言的な現象、すなわち局地的な正書法が反映されていると考えることができる。ただし、先に示した表記のバリエーションの分布と照合すると、同じ方言特徴が現れているはずの第3の書き手（筆跡C）のテキストに、このタイプの表記がなく、第2の書き手（筆跡B）のテキストに若干見られるという結果が得られる。したがって、この形式を生み出した方言的土壌を確定することは容易ではない。

4 結論にかえて

中世ロシア年代記のテキストにおいて、正書法規範にない文字結合が許容された場合、その文字の読み方は様々ではなかった可能性が高い。なぜならば、もし規則違反の結合に特定の決まった読み方があったとすれば、それはすでに規則の一部をなしていることになるからである。もしそのようなことがあれば、例えば Гюрги ~ Юрьи ~ Юрги のような特定の人名に限定されず、もっと広い範囲で Ю と ГЮ, Я と ГЯ, И と ГИ の間に表記の動揺があっ

てもおかしくない。しかし、中世ロシア年代記の正書法はそれほど無秩序ではない。規則違反が許容される範囲は特定の語彙に限られており、読み方はそれぞれの語彙によって違っている。例えば、『ノヴゴロド第一年代記・古輯』には、Гюрг- の変化形以外にも、река（能動現在分詞男性単数主格，第97葉表他），декабря（単数生格，第107葉裏他），кюръ（単数主格，第74葉表他），Анкюдинъ（単数主格，第131葉裏）などの規則違反の文字結合（K＋前母音字）を含む語形がある。そして、これらは現実には река，декабря，куръ，Анкудинъ（または Анкидинъ）のように「K＋後母音字」の結合と同じように発音されていたと思われる。一方，Гюрги については Юрьи が新たな規範形となった時点で，ГЮ～Ю，РГ(И)～Р(БИ) という等価関係が成立した。このため，Гуревич，Гуревича，Гюрга（いずれも『スーズダリ年代記』より）のように「Г＋後母音字」の結合であっても，読み方は ГУ→Ю，РГА→РЯ であったと考えてよい。

「Г＋前母音字」という東スラヴ語の正書法に違反する文字結合を含む Гюрги が Юрьи に標準形の座を奪われた後も，長期にわたって年代記テキストの中で維持されたのは，とりもなおさずその正書法から逸脱した文字結合自体にあると思われる。この文字結合を使うことによって，東スラヴ形と平行して使用され続け，現在まで基本的に表記が維持されている正式形 Георгии（→Георгий）との関連性を書き手が意識していたのかもしれない。実際に，本論文で「折衷的な擬古形」と呼んだ Юрг- が『スーズダリ年代記』では Юр(ь)- よりも多用されているのは，擬古的な表記を使うことで年代記に風格を与えようとした編纂者の意図が働いていると考えることもできる。

参考文献

- [1] 岡本崇男編，「ノヴゴロド第一年代記（シノド本）語彙集」，『古代ロシア研究』，XIX，1994.
- [2] 木村彰一，『古代教会スラヴ語入門』（新装版），2003.

- [3] 中條直樹・酒井純編,『ノヴゴロド第一年代記』(シノド版) コンコーダンス (平成7.9年度・文部省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号07301080). 名古屋. 1998.
- [4] 中條直樹・酒井純編,『ロシア原初年代記』 コンコーダンスⅠ,Ⅱ (平成7.9年度・文部省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号07301080). 名古屋. 1998.
- [5] 中條直樹・酒井純編,『ノヴゴロド第一年代記』(新輯本) コンコーダンスⅠ,Ⅱ (平成10.12年度・文部省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号10410108). 名古屋. 2000.
- [6] 中條直樹・酒井純編,『スーズダリ年代記』(ラヴレンチー年代記) コンコーダンス (平成10.12年度・文部省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号10410108). 名古屋. 2001.
- [7] 中條直樹・酒井純編,『モスクワ年代記集成 (XV世紀末)』 コンコーダンスⅠ.Ⅲ (平成14.16年度・文部科学省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号14310219). 名古屋. 2004.
- [8] 中條直樹・酒井純編,『ノヴゴロド第4年代記』 コンコーダンス (平成14.16年度・文部科学省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号14310219). 名古屋. 2005.
- [9] 中條直樹・酒井純編,『イパーチー年代記』 コンコーダンス (平成17.19年度・文部科学省科学研究費による研究成果, 課題番号17320048). 2006.
- [10] 中條直樹・酒井純編,『ソフィア第1年代記』 コンコーダンス (平成17.19年度・文部科学省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号17320048). 名古屋. 2007.
- [11] 中條直樹・酒井純編,『ブスコフ諸年代記』 コンコーダンス (平成17.19年度・文部科学省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号17320048). 名古屋. 2008.
- [12] Л.Л.Касаткин, *Современная русская диалектная и литературная фонетика как источник для истории русского языка*. Москва. 1999.
- [13] *Полное собрание русских летописей. Том I. Ларентьевская летопись*. Москва. 1997.
- [14] *Полное собрание русских летописей. Том II. Ипатьевская летопись*. Москва. 1998.
- [15] *Полное собрание русских летописей. Том III. Новгородская первая летопись*. Москва. 2000.
- [16] А.Н.Тихонов, Л.З. Бояринова, А.Г. Рыкова, *Словарь русских личных имен*. Москва. 1995.
- [17] *Словарь старославянского языка (Репринтное издание)*. I-IV. Санкт-Петербург. 2006.

- [18] Роман Якобсон, “Спорный вопрос древнерусского правописания (ДѢЖГЪ, ДѢЖЧЪ)”. В кн.: Roman Jacobson, *Selected Writings* I. 1962. 247-253.
- [19] Alexander Issatschenko, *Geschichte der russischen Sprache. 1. Band: Von den Anfängen bis zum Ende des 17. Jahrhunderts*. Heidelberg. 1980.
- [20] Horace G. Lunt, *Old Church Slavonic Grammar*. 7-th revised ed. 2001.
- [21] Nikolaus S. Trubetzkoy, *Altkirchenslavische Grammatik. Schrift-, Laut- und Formensystem*. 2. Auflage. Graz-Wien-Köln. 1968.
- [22] Nikolaos H. Trunte, *Ein praktisches Lehrbuch des Kirchenslavischen in 35 Lektionen. Band I. Altkirchenslavisch*. München. 1997.
- [23] B. O. Unbegaun, *Russian Surnames*. Oxford. 1972.